

人世物語ひとよものがたり

(星の記憶編ほしのきおく)

改訂かいてい

第一卷

あらずじ

シンは、幼い頃に母を亡くし、父の元で大工修行に励みながら大きくなって行きますが、八歳のときその父親も事故で亡くしてしまいます。シンは、一人暮らしをしていたお祖父さんに引き取られ、町一番の棟梁に預けられて大工修行を続けて行きますが、出頭となったシンを妬む兄弟子の嫌がらせを受けて大けがを負い、その後、介護をしながら支えてくれたお祖父さんまで亡くしてしまいます。……肉親を失い独りぼっちになったシンでしたが、自分の産まれた家に戻ると心機一転、家具職人として新しい一歩を踏み出す決意を固めます。そして、店の準備に取り掛かり、明るい希望に胸も膨らみ始めたある日のこと、見知らぬ婦人が訪ねてくると突然、「何よこれ。あー気持ち悪い！」と言うなり、紙包みを投げるように手渡し帰ってしまいます。幾重にも包まれた紙包みを開いてみると、中からは、絡み合う二匹の蛇のような獣の彫られた「銅鏡」が現れました。

ご婦人は、お祖父さんの家を買ってくれた人のようで、銅鏡は……その昔、宮司だったご先祖様が社に祀っていた、古に伝わる「神器の鏡」でした。……が、そうとは知らぬシンは、銅鏡を磨いて新しい店の玄関に飾ることにしました。

それから数年後、元氣になったシンは大工仕事に復帰すると、たちまち建築現場の親方に申し上がるまでに出世します。しかし……酒と遊びを覚えたために生活はどんどん乱れて行ってしまいます。……そして、そんなだらしのない自分を責める日を送っていたある日のこと、お祖父さんが亡くなる前の晩に話していたように、ポロ布を纏ったような老人が訪ねて来ると、玄関先に飾ってあったその「銅鏡」を指して、「……わたしは、此処へ導かれたのです」と、そのポロポロの身なりからは想像もできない旅の噺を語り始めました。

「……わたしは王様でした」と、話し始めた老人の国に、ある日、「マガラ」と呼ばれる魔法の箱が持ち込まれると、国の人々の生活は、それまで考えられなかったような便利で快適な暮らしへと姿を変えて行きます。しかし一方で、人々の心の中の不安は増え続け、国の中には、それまで起こったことのないような凄惨な事件や事故が頻発して行きました。老人はその原因が「マガラ」に在ると考え、国の中から、その「悪」を追い出す企てを立てますが、その決断が、老人を長い旅へと導くことになりました。……こうして老人は、国を出て砂漠を彷徨い歩いた末に「マガラ」の国に辿り着き、そこで出会った人により、「悪」は「マガラ」の中ではなく、弱い自分の心の中に作り出していたことを識ります。

——「マガラ」とは、息子ハン王子の側近に取り立てた、ゼムラによってもたらされた魔法の箱で、ゼムラの先祖は遠い昔、この地の領主でありながら老人の先祖に国を追われ世界を流浪する中で、「マガラ」をその「復讐兵器」に作り上げたのでした——

老人はその後も、王様であったら知り得なかったであろう「命の宝物」を得ながら、「マガラ」とゼムラを巡る心の戦いは、銅鏡に印された「謎」の解き明かされる「その時」へと導かれ……、そして、老人の話が終わったとき、シンはそこに、「秘密」を分け、飛び立つ光輝く龍を見ました——

時代が過ぎ行こうと変わらない、命のテーマを追い求めたファンタジー物語。

## 前書き

この物語に登場する人物や物、それらの名称、情況、場所、その他全ての脚色は架空のものであり、実在するものではありません。

物語の中に語られる思想の問題も、私個人の自己問答の範疇はんちゆうを超えるものではなく、個々の宗教や教義・思想を指して述べたものではございません。またこの物語全体が、一個の人間の内的要素を、様々な登場人物に配置したかたちで構成しており、実在する個人は、私以外には存在しません。

この作品は、私が二十四歳（一九八二年）のときに書いた冊子を元に、その後、幾つかの拙著せつちやを経て、二〇〇四年頃に着手し、十年を経た二〇一五年二月に初版を、その後二〇一六年八月まで改訂かいていを加ながら書き進めて来たものです。

書き出した当初は、娘を寝かしつける前のお伽噺とぎばなしとして短編で終わるつもりが、いつの間にか、前述の冊子を掘り下げる内容となり、このような長編となりました。

二〇一六年八月 筆者

## プロローグ

……これは、一人の人間の心の中の物語であります。

あるところに

あるところに男がおりました。男は大工で名はシンといいました。

シンは物心がつく前に母親を亡くしてしまい、大工だった父親に男手一つで育てられました。

シンの遊び場はいつも父親の仕事場の片隅で、まだ歩き出す前のシンは、父の集めてくれた木の切り屑を山のように積み上げてはそれを壊し、また積み上げては壊しと、そうやって日がな一日、一人遊びで過ごしておりました。

切り屑の山はいつも同じ形に積み上がる訳ではありませんでした。

あるときは直ぐに壊れましたが、あるときはシンの背丈ほども高く積み上がりました。

シンはやがてその遊びに飽きると、今度は手に持った切り屑を近くの切り屑目掛けて投げました。すると切り屑は、別の切り屑に当たって跳ねた後、一回二回と転げてお腹を見せてひっくり返りました。シンはそれがあまりに可笑しくって、次は足元にあった大きな切り屑を膝を曲げて蹴りました。するとその切り屑は、先にあった長い切り屑を押しながらその先にあった切り屑を持ち上げると、それはまるで「たかいたかい」をして貰ったいるようでした。……そこでシンは、今度はもっと大きな切り屑を持って来ると、両手に切り屑を持ち上げ、足元に置いたその大きな切り屑を力一杯蹴りました。すると足が木に触れた途端、シンの体はひっくり返ってしまい、シンは一人で大笑いしました。こうして切り屑は、いつもシンの思いもしない出来事を運んでくれました。

やがてシンは歩き始める頃になると、いろいろな形の切り屑を集めて来てはそれを組み合わせ、鋸を挽いたり釘を打ったりと、まるで一人前の大工の様な仕草を真似ながら、様々な形の家に作り上げて行きました。

——そんなシンの姿を横目で見ながら、『何れは自分の跡継ぎにしたい』と考えた父親は、シンが四歳の誕生日を迎えると、その小さな手に収まる金槌と鉋と鋸を鍛冶屋に頼んで作って貰い、シンのその幼い体を包み込むように手を取り足を道具の使い方を教えるて行きました。

こうしてシンは幼い頃より、父親に大工の基礎を教わり、そして木の切り屑に好奇心をくすぐられながら、物作りの楽しさを身に付けて行きました。

シンの父親は昔気質の職人で、その腕前は遠い村や町にまで知られており、シンは自分もいつか、父親のような立派な大工になりたいと夢に描きながら、学校に上がる歳が来

でも学校には通わず、父親の元で大工の修行に励み続けておりました。

月日は流れ――、

それはシンが八歳になったある日のことでした。

シンは、父親の使いで村の道具屋へ来て、言い付けられた材料を探しておりました。そこへ一人の男が駆け込んで来ると、突然、大きな声で叫びました。

「シン！ 大変だッ！ おまえの父さんが二階の屋根から滑り落ちた。今、医者呼びに行つたから早く来なさい！」

シンは手のものを放り出すと、無我夢中で駆け出しました。

シンが駆けつけたとき、砕けた瓦の傍に仰向けに横たわる父親は呼吸をしておらず、周りを囲んだ大人達の、シンを呼ぶ大きな声が聞こえて来ると、シンの体は突然震え出し、動けなくなっていました。

間もなく、毛布を掛けられ荷車に載せられた父親が動き出したとき、シンの体は誰かに押さえられ身動きもできずに……荷車は、溢れる泪の海の中へと沈んで見えなくなりました。

それから間もなくして、シンは一人暮らしをしていたお祖父さんに引き取られ一緒に暮らすことになりました。

お祖父さんの住んでいる村での暮らしが始まると、シンはまず学校へ通わなければなりませんでした。

しかし、途中から学校へ通い出したシンにとって、学校の授業は退屈極まりなく、先生の喋ることはちんぷんかんぷんで、シンはどうとう授業を途中で抜け出すと、家の倉庫に仕舞ってあった、父親の揃えてくれた大工道具を肩に背負い、村のあちらこちらへ出かけて行っては、拾い集めた材料を切ったり削ったり組み立てたりと、時間が経つのも忘れて一人遊びに耽るのでした。

そんなシンの姿を見兼ねたお祖父さんは、シンの将来を考えた末に学校を辞めさせ、知り合いの大工のところへ修行に出すことにしました。

その大工は、シンのお父さんとは違い、多くの弟子を抱える町一番の棟梁でした。

シンは弟子達の中でも一番若かったので、まずは兄弟子の手伝いから始めなければなりませんでした。

そして始めた仕事は、大工道具を持つことも許されない単純な作業ばかりで……シンの不満は日に日に募って行きました。

そんなシンの様子を見かねたお祖父さんは、

「シン、どんな仕事も、一人前になるまでには辛いことばかりがあるもんじゃ。人間は、その辛いことを乗り越えながら、少しずつ大人に成って行くものなのだから、それを疎

かにしてはならないよ」と、言っではくなくても、それはシンの慰めにはならず……シンはだんだん塞ぎ込んで行きました。

『僕は、大工の仕事がしたいのに……』

とうとうシンは、寝床にしがみついたまま、仕事を休んでしまいました。

お祖父さんは、そんなシンの枕元にやって来ると、

「シン！ おまえはなんて情けない。そんなことで、どうして立派な仕事のできる大工になれる！ こんな情けない姿を見たら……お前の父さんや、母さんはなんと思う。しつかりしろーシン！」

お祖父さんは、部屋の棚に飾ってあったシンの父親と母親の遺影を見上げると、寝床にしがみついたシンを引き摺って、親方の元へ連れ戻しました。

お祖父さんの話を聞いた親方は、

「ヨモヤマさん、これは、あんたがシンを連れて来たときから考えていたことなんじゃが、シンを一人前になるまで儂に預らせて貰えんか」と、言いました。

お祖父さんに見れば、それは願ってもないことでした。

こうしてシンは、大工の親方の家に住み込んで働くことになりました。

シンは、自分を引き取ってくれたお祖父さんや親方にこれ以上の迷惑は掛けられないと思いを決めると、毎日の辛い仕事にも歯を食いしばって耐え抜きました。

仕事が終わると、シンは自分の道具を仕事場に持ち込み、要らなくなった材料を集めてはその日見た親方や兄弟子達の仕事の様子を真似、そして次にやるべきことを自分の頭で考えました。

シンは誰に言われることもなく、それを毎日の日課にして行きました。

それから時は過ぎ、シンは十五才になりました。

その日ー、シンは自分の誕生日のことなどすっかり忘れて、いつものように兄弟子の手伝いに励んでおりました。

そこへ親方が現れると、シンの所へやって来てこう言いました。

「シン。お前はそれはもういいから、今日から道具を持ちなさいー」

その信じられないような親方のことばに、シンは一瞬、我が耳を疑い、親方の顔を二度また三度と確かめました。そしてそれに答えるように、二度……三度と、親方が頷いてくれたとき、シンの体はまるでバツタが跳ね回るように、親方の周りを飛び跳ねておりました。

その日からというものの、シンは父親の教えで身につけた大工仕事の基礎の上に、日々親方や兄弟子達から盗み学んだ技術の応用を積み重ね、みるみる腕を上げると、遂に、一つの現場を任されるまでになりました。

しかし……そんなシンの出世振りに、面白くないのは兄弟子達でした。

兄弟子達は互いに申し合わせると、ことある毎にシンの仕事の邪魔を繰り返し、それはどんどんエスカレートして行きました。

その日――、一人の兄弟子は、シンを手伝いながらその機会の訪れを窺っておりました。

シンと兄弟子は、小山のように積み上げられた柱のその一番下の柱を取り出すために、積み重なった柱の片方ずつを持ち上げながら、横の壁に立て掛けておりました。

そしてやっと一番下の柱に辿り着いたとき、兄弟子は用意しておいた木っ端をポケットの中から取り出すと……自分の足下にそっと置き、勢い勇んで持ち上げたその瞬間――シンの足下が蹴り出しました。

木っ端は、ものの見事にシンの降ろした足下へ潜り込み、木っ端に降ろしたシンの膝が折れた瞬間――兄弟子は持っていた柱を押ししました。

シンはたまらず、勢いあまって後ろにつんのめり、壁に立て掛けてあった柱の中へ突っ込むと、そのまま……身体は倒れ始めた柱に向かって滑りました。

柱は、周りの柱を巻き込みながら崩れ落ち、シンの体は忽ち見えなくなってしまいました。

それは、兄弟子の予想もしない惨事となってしまいました。

\*\*\* 気がつくとき、そこにはお母さんの姿がありました。お母さんは、いつもより近くに居て、微笑みながら両手を広げてくれました。しかしシンが近づくとき少し離れ、また近づくと少し離れ、いつまで追いかけてもお母さんのその手に触れることはできませんでした。周りを見ると、そこには美しい花々が咲き乱れ、喩えようもなく懐かしい匂いが辺り一面に立ち込めておりました。そしてシンが、その匂いの中に身を投げ出すように『おかあさん！』と叫んで踏み出そうとしたその瞬間、

「シン！ シン！」と、呼び止める声があり、シンはそこで立ち止まり、声の方に振り返りました。それは、お父さんでした。

「シンっ！ お前は未だそっちへ行っちゃ駄目だ！ 戻りなさい！ シン！」シンはそのことばにはつととなりました。すると直ぐにまた別の声が重なりました、

「シン――！ シン！ 目を覚ませ、シン！」その声に導かれるように、シンは真っ暗な中から浮き上がるように、ゆっくりと目を開きました \*\*\*

眩しい光の中から現れたのはお祖父さんの顔でした。

――事故をした当時、シンの呼吸は止まり、手足はあらゆる形になっておりました。

駆けつけた誰もがシンは死んでしまったと思い、そして誰もシンを動かさないまま、兄



弟子の一人が医者を呼びに走りました。

丁度その頃、お祖父さんは一人前になった孫の仕事ぶりが見たくて親方のところを訪ね、つい今し方、親方の家を出てシンの仕事場へ向かっていたところで、医者の方へ走っていた兄弟子と鉢合わせになりました。

話を聞いたお祖父さんと親方は事故の現場へ急ぎ、着くなりお祖父さんは、床に横たわるシンの胸に耳を当てて……まだかすかに動いている心臓の音を聞きました。

『医者が出るのを待っていたら、シンは本当に死んでしまう！』咄嗟、お祖父さんは近くにあった荷車を引いてくると、周りの者が止めるのも聞かずにシンをそこに横たえ、医者を目指して駆け出しました。

『神様っ！ どうか、シンを助けてください！』お祖父さんは、心の中で叫びながら走り続けました。

そして駆け込んだ病院には、偶然にも腕利きで名の通った医者が居合わせており、病院の院長は、シンの様態を見るなり直ぐに協力を求めました。

訪ねていた医者はそのことばの終わらぬ内に支度を始めると、直ちに治療に取り掛かり、まるでシンのお父さんのような手捌きでシンの手足を元の形に蘇らせて行きました。

手術は翌朝未明にまで及び……、シンは奇跡的に命を取り留めました。

手術を終えた医者は、

「おそらく完治しても、体の半分が動かさない状態が続くでしょう」と、お祖父さんに告げました。

大手術が終わって二ヶ月が経って、シンはお祖父さんの自宅へ移され……、それから、半年余りが経ちました。

シンは体の半分が動かない状態でありましたが、それでも何とか、寝転んだ状態でも自分の身の回りのことはできるまでになっておりました。

お祖父さんは八十歳に近い体でありましたが、行く先短い自分のことよりも、シンの将来を何とかしてあげたいと、一日も休むことなく介護を続けてくれました。

「お祖父ちゃん、ごめんね……」

そんなシンの浮かべる涙を拭いながら、お祖父さんはしゃがれた声で言いました。

「シン……お祖父ちゃんは、お前の面倒が看れて嬉しいんだよ。シン、儂はお前の父さんに子供の頃から、辛く厳しいことばかりを言って、優しい言葉の一つも掛けてやれずに育ててしまうんじゃない。それは……年を取って産まれたあいつが、甘えん坊にならんように思っていてやって来たことじゃったが、しかしあいつは、その願い以上に立派な大工になっ

てくれた。シン、お前の面倒を見てくれてるあの親方はな、お前の父さんのことをとても尊敬しておつてな。昔、親方は、お前の父さんの仕事ぶりに惚れて、自分の所へ来ないかと随分誘った時期があったそうじゃ。じゃがお前の父さんは、自分は納得の行く仕事を続けたいから……と、親方の誘いを断り続けたんじゃと。親方は、あいつの仕事が一番に認めていたんじゃ。親方も若い頃はあいつのように、自分の思いのままの仕事がやってみたかったんじゃよ。……しかし親方は、継がねばならない仕事であったから、腕を磨く他にもやらねばならない仕事が多かったんじゃ。——その後、息子のできなかつた親方は、最初にお前を見たときに、『本物の大工に育てたい』と、自分の夢も託してお前を引き取ってくれたんじゃ……」

シンは、そのとき始めてそのことを知りました。

「じゃから……シン、お前がこうして儂と暮らすようになったのは、神様の巡り合わせというものじゃ」

シンはお祖父さんの話を聞きながら、そんなお祖父さんと、そして天国で見守ってくれているであろうお父さんやお母さん、それに、お世話になった親方のためにも、自分はまだ一度元気になつて、お父さんのような本物の大工になろうと決心しました。

それからシンは、お祖父さんの手を借りながら、次第に堅くなつて行く手足の関節を動かすための訓練に励みました。

そして訓練は毎日毎日休むことなく続けられ、それはやがて鍛錬となつて進んで行きました。

しかし一年二年と時が経つても自分の思うようにならない苛立ちは、ときとしてお祖父さんに向かってしまいました。

やがて事故から五年が経ち、シンは二十一才になりました。

その頃になると、シンの体も大分動けるようになって、体の状態に見合った家具作りを始めると、話を聞き付けた近所の人々が集まり始め、椅子やテーブルといった比較的大きな注文まで依頼を受けるようになりました。

こうして作業の間、シンは体の不自由など思い出す暇もないほど夢中になつて、近所の人々の持つてくる注文に応えながら、「僅かだけど取つて……」と言つて手渡される手間賃を糧に、しかしそれでも身体の元気になつて行く喜びと、近所の人の喜ぶ笑顔に支えられて、一日はあつという間に過ぎて行きました。

しかし、そうしてシンが元気になつて行く一方、お祖父さんの体は年々弱々しくなつて、寝込むことも多くなりました。

そんなある夜――、

シンがいつものように、その日の仕事を終わらせてお祖父さんの隣に転ぶと、お祖父さんはそれを待っていたかのようにシンを見詰め、細い、しかししっかりとした口調でこう話し出しました。

「シン……儂はもう長くない。お前と話ができるのも、これが、最後になるかも知れないから……これから、儂が話すことは忘れずに覚えておいて……お前が困ったときや、自分を見失うようなことがあったときに思い出しておくれ……」お祖父さんはそう言うのと、シートの上の骨と皺だらけの手を滑らせながら、シンの頬に触れ、そしてシンの目の奥をじっと見詰めました。

「――シン。人間というものは実に弱いものだ。どんなに、自信に満ち溢れているようでも……気づかぬ小石に躓くものじゃ。だから……シン、決して自分に慢心してはならないよ。そして、自分に起こる……全てのこと、感謝の気持ちを持ちなさい。それはみんな、神様が……おまえのために……用意して下さることなのじゃから。……シン。人間が、自分の頭で考えることなど……たかだか知れたことじゃ。しかし――神様が運んで下さるものにはのー、人の知恵の及ばぬ……深い、深い恵みが……隠されているんじゃないよ。」

……シン、お前の人生のこれから先、どんな苦しみがやって来ようとも、それはお前に、掛け替えのない恵みをもたらすために……〈神様が用意して下さる贈り物〉だと、思いなさい。いや、そう信じなさい。……シン。人生とは短いものだ。今、言った……儂のとばを忘れずに、そして自分を信じることに……迷いなく……生きて行きなさい。そうすれば、神様は、お前の考える望み以上のものを……必ずお前に与えて下さるから――」

シンは、お祖父さんのことばの暖かな響きに包まれながら、いつしか眠りに落ちておりました。

……次の日、シンは冷たいものを感じてはつとになって飛び起きると、お祖父さんは、シンの手を包むように握り締めたまま、静かに息を引き取っておりまして。

数日後……、

シンは葬儀に来てくれた親方に、今後のことを尋ねられました。

親方は、また戻って来ないかと言ってくれましたが、シンは兄弟子達の嫌がらせを言うことができませんでした。

シンは親方に、「自分は家具職人として独立したいんです」と心の内を話しました。

親方は、そんなシンの気持ちを酌んでくれると、

「解ったよ、シン。しかし何かあったら、必ず儂の所に来るんだ。……いいね」と、そう言っつて、その後もいろいろなことがある度に親身になって相談に乗ってくれました。

シンは、お祖父さんの家を売りに出すことにして生まれた家に戻ると、そこから気持ちも新たに、人生の再スタートを切ることにしました。

そして新しい門出を思い描きながら、埃にまみれた家の整理に励んでいたそんなある日のことでした。

見知らぬご婦人が訪ねて来ると、突然、不機嫌そうな口調になって、

「――棚を取り外していたら、いきなり転がり落ちてきたのよ！……何よこれ、ああ気持ち悪い！」と言うなり、投げけるように紙包みを手渡すと、踵を返して立ち去ってしまいました。

シンの手の中に渡された物はずっしりと重く、幾重にも包まれた紙を開いて行くと、中からは薄汚れた丸い形をした金属のメダルのような物が現れました。

金属の表には彫刻が施され、裏はつるつるの面になっておりました。

彫られたものをよく見ると、それは絡み合う蛇のような姿をしていて、その真ん中には人のような姿も彫られていました。

シンはやつと事情が掴めました。どうやらそのご婦人は、お祖父さんの家を買ってくれた人のようでした。

…そのときシンは、お父さんが亡くなって、お祖父さんに引き取られたばかりの頃に聞いたご先祖様の話を思い出しました。

それは、シンのご先祖様が、代々この土地に続いた神社の宮司を務めていて、お祖父さんの何代か前のご先祖様がこの土地に続いた禍に遭って亡くなってしまった後、しばらくの間、男子の跡継ぎができない時代が続き、「…こんな御利益の薄い神社を祀っているのは先が不安だ」と、神社を支える氏子は離れ、やがて神社は荒れ、傷みの酷くなった社は取り壊されてしまった…ということでした。

\*\*\* 銅鏡は、その社に古の昔より祀られていた、代代に受け継がれし「神器の鏡」でした \*\*\*

そうとは知らないシンでしたが、初めて手にするその丸い金属には、お母さんの面影が醸し出す…あのなんとも譬えようのない懐かしい匂いと、そこはかとない温もりのようなものが感じられました。

シンは早速それを磨き、金属全体の緑色の錆を取り除いてゆくと、金属はぴかぴかに光り出し、忽ちシンのお気に入りとなりました。古物屋に尋ねると、それは銅でできた鏡であることが解りました。

シンは、時間を見てはつるつるに研かれた鏡面に様々な角度の自分の顔を映してみましたが…そこに映るのは、いつも違って見える歪んだ顔でした。

十日もして歪んだ顔に見飽きたシンは、その光る鏡面を、新しく始める店の玄関に飾ることにして、銅鏡を門柱の上に収めると、鏡面は、思ったよりも良い按配に格調高い光を放ち出しました。

新しく始めた店では食べて行くのがやっとでしたが、それでもシンは、どんな些細な注文でも訪れる人の喜ぶ顔を思い描きながら、大事に丁寧に一つ一つの仕事を仕上げてくださいました。

そして、時は三年四年と流れ、家具屋の仕事にもだいぶ慣れると、シンは、自分の体に漲る力が戻っていると感じ始めました。

シンは、『……こんな、小さな仕事ばかりこなしていても腕は落ちるだろうしな……、ああー、もっと腕の振るえる仕事がしたい。——そうだ！ 大工仕事に戻ろう。兎に角まずは、腕慣らしに町に出てみよう』と思い切ると、店を畳み、町の建築現場に出ることにしました。

その頃、町には、世の好景気の波が押し寄せて、建築現場は人手不足で仕事に追われ、特に腕のいい職人は各現場の奪い合いになっておりました。

シンの始めた仕事はというと、父親や親方から教わった仕事の内容とは比較にならない単純な作業でしたが、賃金は驚く程のものがありません。

シンは、大工仕事の勘が戻るまでの僅かの間に、誰より早く仕事を覚えると、直ぐにその腕を発揮してたちまち現場の親方へと押し上がって行きました。

——シンはそこで、酒を覚ええました。

仕事が終わると、夜な夜な仲間と共に町へ繰り出し、美味しい物を食べそして様々な酒を味わって歩きました。

こうして……以前には考えられなかった生活がシンの元に訪れました。

町は好景気に沸き、どこも客で賑わい、そこでは様々な賭け事も行われました。

シンは生まれて初めて賭け事に手を出すと、その危険な味とスリルに酔いしれながら、心は次第に誘惑の深みに嵌まって行きました。

そして一度大きく勝って仲間にご馳走を振舞ったときに、「シンには賭け事の才がある！」と祭り上げられると、その後負けることが続いても、頭の考えとは裏腹に、心は深みに溺れて行くばかりで、気づいたときにはもう……そこから抜け出すことができなくなっておりました。

こうしてだらしのない生活に浸かり、明け方まで遊んではそのまま寝ないで仕事に行くことも増え、また仕事は、それでも間に合わせることもできませんでした。

『……こんな生活を続けていたら、俺は本当に駄目になってしまおう！』シンは、一度覚えたい甘い誘惑に、抵抗できなくなると行く自分を不甲斐なく見詰めたが、そんないい加減な自分の性格を責め続ける日々を送りました。

\*\*\* そのときシンの心の中には…… 誰も真似のできない立派な仕事に打ち込む父親の姿と、それとは逆に、見栄えだけを第一に、いかに早く仕事をこなし終わらせるかを競い合いながら、高い賃金を貰って満足する自分の姿があつて……この二つは、シンの心の中で激しい闘ぎ合いを繰り広げておりました \*\*\*

連日、寝不足の続いたそんなある日のこと……、  
久々に休暇の取れたシンは家に戻ると、食事も早々に、次の日の朝寝坊に備えさつさと寝床に潜り込み、いつものお母さんの面影と共にやって来る、諭えようもなく懐かしい匂いに包まれながら……在りし日のお父さんの姿や、亡くなる前の晩に話してくれたお祖父さんの話しを思い出しながら、今の自分の情けなさを省みて、ウトウトと眠りの中に沈んでおりました。

——と、そのとき、

ドンドンドンドン——と、家の戸を叩くものがありました。

寝込みを襲われたシンは、不機嫌に毛布を蹴ると寝床から飛び起き、戸口の方に向かって声を荒らげて言いました。

「はい。どなたですか！」しかし、戸の外から返ってくる返事はありませんでした。

シンは、重たい瞼を押し開け部屋の明かりを点けると、作業場の床を跨いで冷たい戸口に耳を当てました。

すると……戸の外にかすかな呻き声のような物音があつて、それは直ぐに聞こえなくなりました。

シンは、戸の横に立て掛けていた棒を手につつと、止め鍵を外して少しだけ戸を引き、隙間を通して外の様子を覗き見ました。が……戸が重く、隙間がいくらも開いておらず、シンは棒を立て掛け直して腰を決めると、指先に力を入れて戸を引き直しました。

すると戸は、何かを引きずりながらずると開くと、突然そこに人の背中が現れ、シンは思わず飛び退きました。

背中には僅かに体を上向きに起こしながらその手を持ち上げると……何かを指差して直ぐにだらりとなりました。

\*\*\* と、そのときシンは…… さっきまで包まれていたあの、懐かしいお母さんの匂いが、外の空気に混じりながらシンの体を包んで行くのを覚えました \*\*\*

シンは恐る恐る横たわる人の顔を覗き込みました。

部屋から洩れる明かりに浮かび上がったその姿は、ボロボロの服を着た老人のようでしたが、次の瞬間、シンの脳裏に浮かんだのは、小さい頃に見たあの……砕け散った瓦の傍に横たわるお父さんの姿でした——

シンは表に出ると老人を抱き起こし、

「大丈夫ですか！ 大丈夫ですか。お爺さん！」と呼び掛けました。

すると老人は、目を閉じたまま首をもたげると、何事かを呟き、震える手でシンの顔

に触れました。

それは、今にも散りそうな、花びらのような感触で……、

シンは、『取り敢えずは一旦、自分の寢床まで運んで様子を見よう』と思いました。

そうして抱えた老人は、まるで幼児のように軽く、服は泥と埃にまみれたボロ布のようでした。

シンは寢床の毛布の上に老人を横たえようと、別の毛布を出して老人の体を包み、その上に掛け布団を掛けてやりました。

寢床はさつきまで、亡くなる前の晩のお祖父さんのことばを思い起こしていた為か、『この老人は、何か特別な出来事を運んで来たのかも知れない』と、一瞬思いましたが……それは直ぐに打ち消して、

「あー、厄介なものを抱え込んでしまったな。どうしよう……」と困り果ててしまいました。

暫く様子を窺っていると、老人はいつの間にか、口元に笑みさえ浮かべて寢息を立て始めていたので、シンは、『とにかく今日はこのままにして、明日を待つことにしよう』と思いました。

シンは、持っていた最後の毛布を寢台の横に敷いてそこに転ぶと、ありったけの服を体に掛けて丸くなりました。

しかし、夜中に何度も目が覚めて、老人の様子を窺っては転び窺っては転びながら、やっと眠りに就けたのは夜明け前のことでした。

翌朝……、

だいぶん陽が高くなって飛び起きたシンは、直ぐに寢台の老人を覗き込みました。

老人は、そんなシンを余所に、ぼつちりと目を開き天井を見詰めておりました。

「あー、……気が付きましたね。良かった」と、掛けたシンのその声に、老人はなんとも美しい笑顔で微笑み返しました。

「あ、り、が、と、う」老人は、たどたどしく弱い声でそう言いました。

「いいえ、いいんです。困っているときはお互い様ですから」とシンは、取り敢えず社交辞令となつているようなことばで答えました。

すると老人は、痩せた頬を震わせながら泣き出してしまいました。

老人の溢す涙は、わずかに瞼に滲むだけで、ことばにならないヒーヒーという音を立てながら、その痩せ細った体を揺すりました。

「……どうしましたか、何があつたんですか？」

しかし老人は泣き止みませんでした。「……僕では力になれないかもしれないけど、良かったら話してくれませんか」シンは老人に顔を近づけながら、その痩せ細った体に触れました。

……と、そのとき、シンは老人が違う国の人であることに気がつきました。それに、老人の身につけていた服は見たこともない衣装で、それは明らかに、身分の高い人が身につけるような金糸銀糸の刺繍の跡がありました。

しかし、それにしてもボロボロの服は継ぎ接ぎだらけで、直ぐにはそれとは分らないほど傷んでいました。

シンは、『この老人はきつと、身寄りも無く、着る物も食べる物も無い状態で、ゴミ箱などの食べ残しを漁りながら、はるばる遠い国から彷徨い歩いて来たのだろう』と、勝手な想像を巡らせながら、老人が落ち着いたら、駐在所に引き取って貰おうと思いました。

「……ところで、お爺さんはどこから来たんですか？ お家はどこですか？」あまり関わり合いになりたくなかったシンは、当たり前障りのない質問をして尋ねてみました。

老人はそのことばを聞くと、ゆっくりと瞼を開き息を整えながら、

「わ、た、し、は…… と、お、い…… と、お、い…… く、に、か、ら……」老人は、口の中の水分を集めるために何度も喉を鳴らしてそこまで言うのと、一旦ことばを切り、天上を見上げ、そこに何か探しているようでした。

そして老人は、思い出したかのように、

「わ、た、し、は…… お、う、さ、ま…… で、し、た……」と言いました。

シンはそのことばに思わず身を引くと、『何を突然言いだすんだ……この老人は！ 俺を世間知らずの若造だと思って』と、最初にそう思いましたが、『……しかし待てよこの爺さん。実は舞台役者か何かで、この近くの町で公演の最中にとんでもない災難に遭い、そのまま難を逃れてここまで辿り着いたのかも知れないじゃないか？ それともひよつとすると、舞台役者に扮して客寄せチラシでも配っていて、途中で嫌になって逃げ出して来たとか……？ そんなことないか』

老人は、そんな空想に耽るシンの様子を静かに見詰めながら、

「しん、じ、られ、ま、せんか？」と、先ほどより滑らかなことばで喋ると、その口元に笑みを浮かべました。

シンは、その老人の目がとても澄んでいたのので、嘘で話しているのではないな、と思いました。

今の、このだらしのない生活をしている自分とはまるで違う、澄んだ美しい眼差しでした。

「わた、し……もう、ながく……ない」そこまで言って、老人は激しく咳き込み苦しそうでした。

「あ、あ、解りましたから、もう喋らないで下さい。今、お医者さんをお呼びに来ます！」そう言って、立ち上がろうとしたシンのその手を、老人は渾身の力で掴みました。

「はな、し、を……！ は、なし、を……！」老人は、なおも苦しそうに咳き込みながら、「みず、を…… み、水を……くだ、さい」と言いました。

「は、はいっ！」シンは慌ててコップに水を入れて持って来ると、老人の背中に手を当て、その枯れ木のように痩せ細った体をゆっくりと起こしてやりました。

老人の手の平は、シンの手を包むようにしながら自分の口元までコップを運ぶと、ゴクリまたゴクリと、僅かな水の量を大きな音を立てながら、その細い喉の奥へと運びました。

水を飲み終えた老人は、シンの手から自分の掌をゆっくりと離すと、再びシンを見詰めて微笑みました。

シンはまたゆっくりと老人を横たえてやりました。

「ありが……とう。たすかり……ました」老人のことばは、シンの耳にもはっきりと聞き



取れる艶が戻り、少し元気になったように思われました。

「わたしの名は……」老人のことは、そこで暫く途切れ、

「わたしの名は……サ、ム……と言います」老人は、その細い指でシンの手に触れながら、

「あなたの名は？」と、尋ねました。

「はい。シンといいます」シンは直ぐに答えました。

老人は目を閉じると、何度か口元にシンの名を呟き、

「よい名……ですね。わたしにも……孫が、あります。お父さん……お母さんは？」

シンは一瞬、答えるのに戸惑いましたが、

「母も父も亡くなりました」と、正直に答えました。

サム老人は、シンの手に自分の掌を重ねると、

「すみません……」と、また優しく温かい眼差しでシンを見詰めました。

シンは首を横に振って、サム老人の気遣いに答えました。

シンの手は、老人の乾ききった手に握られながらも、不思議なことに其処には何か暖かなものを感じておりました。それはあの……門柱の上に飾り付けた、絡み合う獣の彫られた丸い金属を最初に握った、そのときと同じもののように感じられました。

『この感触は？……一体何だろう』それは不思議な、謎めいたものでした。すると、

「シン、わたしは……此処へ……導かれたのです」と、突然サム老人は告げました。

それは、昨晚、サム老人を見たときに感じた、シンの中の懐かしい場所……それは亡くなったお母さんのことを想い出すときにもいつもやって来る、あの譬えような匂いの立ち込める……遠くて近い場所から聞こえて来るようでした。

と、そのとき、

『……シン……自分の身に起こる全てのこと感謝の気持ち忘れてはならないよ。神様が運んで下さるものには、人の知恵の及ばぬ深い恵みが隠されているのだから……』と、お祖父さんのことばが蘇り、シンの全身は総毛立ちました。

シンにはまるで、お祖父さんがこの老人の到来を告げ知らせていたのではないか！——とすら思えました。

「シン……あの、入り口の……」

シンにはそれが、倒れていたサム老人が最初に指差した、それであると直ぐに解りました。

「あー、あの丸い鏡ですね」と、シンは答えました。

サム老人は頷き「……知って、いますか？」と、シンの目を覗き込みました。

シンは、お祖父さんの家から出てきたその銅鏡の謂われについては、何も知りませんでした。

シンは首を横に振りました。

「シン……あの鏡の裏に彫られている二匹の龍は……人間の中に働く力を……現しているのです」と、話し出したサム老人の目には、見る見る力が漲って来ました。

「……その片方の龍の手に……」時「という珠が握られており……また片方には……時」の痕が印されていて……奪われた時」を取り戻そうと争い合っているのです。この龍の一方には……過去」があり、また一方には……未来」があつて、一つで在ったものが……分かれたたが為に生じた……今」をめぐる……奪い合うのです。――シン、この珠の中に……何が見えますか？」

シンは、余りに唐突な質問に、何をどう答えてよいのやら、暗がりの中で自分の居場所をまさぐるように、様々なことばを思い浮かべてみました。

サム老人は、そんなシンの様子をじっと見詰めていました。

「……きつと、何かとても美しい……もの？」シンは、とにかく何か美しいものをそこに想像しました。

サム老人は小さく頷くと、

「シン、それは、一体……どんなものですか？」

またしばらく考えたシンは、

「……たぶん、この世のものでは現せないほどの、輝きを持つもの……？」

そのことばを聞くと、サム老人は静かに瞼を閉じました。そして、

「シン……想像して下さい。その輝きとは……一体、何ですか？」

シンは、それ以上考えを進められなくなって、頭を抱えて唸り声を上げました。

「グー、そんなこと突然聞かれても、考えたこともありません」

「シン……あの龍たちも……貴方と同じように……珠の中の今」を、覗くことが、できないのです。そして珠に記された、今」の……その、美しさを求めて……天高く、そして地上の深くを……互いに、もがき苦しむように、探し回るので。シン……人も、この二匹の龍と同じ……今」を、追い求めて……生きるのです。そして……やがて龍は……其処に印を視ます。印は……自分を、裁き姿となつて……現れるのです。それが――十字架なのです。そして……龍が、その十字架は……自分の行為によって、打ち立てられた、と識るときに……二匹の龍の中心に印された、男であるものと、女であるものが……器となり、未来」であるものと、過去」であるものから注がれるものを、受け取ります。そして、その中から現れた人間が……十字架を離れ、翼に姿を変えたと……龍は、それが今」であると、識るのです。そして今」は……無限の美しさと、無限の可能性と、無限の希望を、龍に向かつて解き放ちながら……分かれたた目的は……果たされて行くのです。シン……生きることは……天の示されるその愛」を……授かる……ということなのです。わたしは、そのことを……あなたに伝えるために……長い、永い旅を、続けて来ました。そして、わたしの負った贖罪は……とうとう、癒やされる……その場所」へ、やって来ました――」

サム老人はそこまで話すと、シンの手を握っていた両手を離して自分の胸元に組み、天を見詰め、そして目を閉じると、

「ありがとうございます。……ありがとうございます」と、口元に呟きました。

シンには、サム老人の話していることがちんぷんかんぷんで、まるで、お祖父さんに引き取られて通い始めた学校の先生の授業を聞いているようでした。……が、しかしそのことばの響きは、美しい奏となつて、お祖父さんのことばの響きと重なり合いながらシ

ンの心の奥深くへと染み込んで来るようでした。

このときシンは、『サム老人の言うことを、信じてみよう』と、思いました。

「シン。長い長い、これまでの旅の中で、わたしの話しに最後まで耳を傾けてくれた人は……誰一人、居ませんでした。シン。わたしがこれから話す旅の噺を……最後まで聞き届けてくれますか？」サム老人は、優しい眼差しの中にも強い意志を込めてシンを見詰めました。

シンも、サム老人のことを、まるで本当のお祖父ちゃんのように見詰めると、親しみを込めて深く頷きました。

そしてサム老人は、肉体に残された最後の力を燃やし尽くすように語り始めました。